

序 章

松山大学は 1923(大正 12)年に地元政官財界のあついで要請に応じて設立された松山高等商業学校を前身とする。「学園創設の父」新田長次郎は、実業家で教育の大切さを理解していた人物であった。新田長次郎は、15歳の時に福沢諭吉の「学問のすすめ」を読んで発奮し、実業家となったのちも福沢諭吉に対する尊敬の念は強く、「福沢先生は事業の親と思い、先生のお姿を油絵にして、これを額に入れて掲げ、朝夕尊敬の気持ちを表している」(『新田長次郎翁談話集』より)と述べている。長次郎の揮毫「独立自尊」という書画が本学会議室に掲げられているが、これは我々大学人に責任ある大学運営を呼びかけたものである。

さて長次郎は大阪で恵まれない子供たちのために 1911(明治 44)年に私立有隣尋常小学校を設立し教員を採用し、生徒たちには教材だけでなく衣服、履物まで提供していた。同小学校は、まもなく大阪市に委譲されることになった。このように教育に情熱を持っていた新田長次郎は、郷土に高等商業学校の設立の気運が高まると「学校運営に関わらない」ことを条件に、私財を提供して設立実現に貢献した。ここに本学の前身である松山高等商業学校が誕生する。

松山大学の沿革

- 1923(大正 12)年 松山高等商業学校開校
- 1944(昭和 19)年 松山経済専門学校と改称
- 1949(昭和 24)年 学制改革で松山商科大学となり、商経学部設置
- 1952(昭和 27)年 短期大学部商科第二部を併設
- 1962(昭和 37)年 商経学部を発展的に解消、経済学部、経営学部を設置
- 1972(昭和 47)年 大学院経済学研究科修士課程設置
- 1974(昭和 49)年 人文学部(英語英米学科、社会学科)開設
大学院経済学研究科博士課程開設
- 1979(昭和 54)年 大学院経営学研究科修士課程開設
- 1981(昭和 56)年 大学院経営学研究科博士課程開設
- 1988(昭和 63)年 法学部開設
- 1989(平成元年)年 松山大学、松山短期大学と改称
- 2006(平成 18)年 薬学部医療薬学科開設、
大学院社会学研究科修士課程、博士課程開設

松山高等商業学校創設以来、本学は地元のあついで声に応じてきた。戦後の学制改革で松山商科大学になった本学は 1952(昭和 27)年に短期大学部を設立して地元勤労者のための高等教育機関としての一翼を担ってきた。常に社会の要請に応えるべく高等教育機関としての役割を担ってきた。80 有余年が過ぎた今、人文学部に大学院社会学研究科修士課程・博士課程を開設し、新学部として薬学部医療薬学科を開設することになった。6 年制薬学部では薬学の専門知識を持った社会に有為の高度専門職業人の養成を主眼とするものである。これまで以上に地域社会に対する貢献ができるものとする。

本学では大学の活動、実態、現状を把握する目的で『松山大学一覧』(学校法人 松山大学)を毎年作成している。因みに 2004(平成 16)年度『松山大学一覧 平成 16(2004)年度 事業報告』の内容をあげれば企画調査部、広報部、総務部(庶務課、人事課、)、財務部(経理課、管理課)、キャリアセンター事務部、学

生部(学生課、国際センター課、保健室)、教務部(教務課、学務課、入試課)、情報システム部、図書館事務部、総合研究所事務部、短期大学事務部のすべての部署の活動状況が明示されている。ただし毎年発行する松山大学一覧は、多くの個人情報が含まれているため学外への公表はせず、学内関係者のみの資料として配付してきた。「第三者評価」というフィルターを通したものではないが、学内の教職員は本学独自の自己点検・評価結果を真摯に受け止めていることは言うまでもない。

上述の動きとは別に本学の自己点検・評価は、1997(平成9)年に「自己点検・評価準備委員会」が設置されてから本格的にスタートをした。この準備委員会は4学部長、2研究科長、短期大学副学長、図書館長、総合研究所長、教務委員長、入試委員長、学生委員長、就職指導常任委員長などの学内各種委員会の責任者など合計22名から構成されていた。同委員会では自己点検・評価活動の意義や進め方等について議論がなされた。この準備委員会の活動を引き継ぐ形で、本学の「自己点検・評価委員会」が1998(平成10)年3月に設置されることになった。

1998(平成10)年には松山大学自己点検・評価委員会規定が制定された。自己点検・評価の成果は『松山大学の現状と課題・・・1998年度自己点検・評価報告書』というタイトルで1999(平成11)年3月に刊行された。その後、学内における改善、改革の取り組みから多くの教訓を学び、自己点検・評価結果の客観性、妥当性について第三者の意見を伺い、今後の更なる改善・改革へ向けてのアドバイスを受けるため、松山大学自己点検・評価委員会は2002(平成14)年に大学基準協会による「相互評価」を受けることを前提に『松山大学の現状と課題-2001年度点検・評価報告書』を作成した。

こうして大学基準協会による自己点検相互評価を2002(平成14)年12月に受けることになり、今回は二度目の相互評価になる。このたびの自己点検・評価結果には、第1回目の自己点検評価で指摘された勧告、改善事項に対する報告も掲載されている。

21世紀の新しい時代の要請に答えていくためには、本学が掲げる教育理念をいかに実現して社会に貢献していくかである。本学には創設当初から「真実」、「忠実」、「実用」の三実主義があり、この精神を学生に受け継がせていくことにする。学生が学究活動や部活動を通して三実主義を自然に体現できるように教育指導していくことが大切なことである。そのひとつとしてカリキュラムのなかに自学史教育として「独立自尊学」(松山大学論)を導入することで、学生諸君に、大学とは何か、今いる自分の居場所(大学)がどのような人物によって、どのような思想によって創設され、今日に至ったかを学ばせたい。学生諸君が、80有余年の歴史をもつ松山大学で学び生活をしていることを正しく認識させ、同時に松山大学生としての誇りをこれまで以上にもたせたい。

本学が取り組む課題として「やる気を引き出す」方策が検討されなければならないが、そのやる気を引き出す一つの方法が自学史教育「独立自尊学」(松山大学論)であると考えます。

政治・経済・文化など国際関係の緊密化や交通・通信手段の発達、グローバル化を一層加速させてきた。本学は海外の大学と単位互換事業、研修制度などで教育研究における国際化を実現してきた。世界に通用する人材養成を考えると語学能力の向上が問われてくるが、本学では基礎的な語学能力の向上にも力を入れることにし、教学改革をおこなっている。と同時に日本語能力の向上にも着手しようとしている。

薬学部が2006(平成18)年4月から開設される。経済学部、経営学部、人文学部、法学部の既存4学部に新しい理科系の学部が誕生することで総合大学に一步踏み出すことになった。当然のことながら、これまでの教学政策に加えて薬学部の学生を視野に入れた新しい教学面での取り組みもおこなわれようとしている。

我々はこれまでと同様に定期的に自己点検・評価を実施して、本学の抱える問題点や課題を明らかにし、改善・改革の方策を教員・職員がともに考えていかなければならない。他方で自己点検・評価の結果につ

いて第三者評価を受けることで、大学高等教育の質保証を実現していかなければならない。それが大学に学ぶ学生諸君やそのご父母に対する大学の責務であり、また大学の社会に対する責務でもあると考える。

2006(平成18)年 3月 20 日

自己点検・評価委員長 平 田 桂 一